ネーミングについて

飯田朝明

　ネーミングとは、命名―名付けることで、特に「ネーミング」は、新商品や会社などに効果的な命名をすることを指していう場合が多い。

　私たちの姓名、住所の地名、出身学校名などというものだけでなく、今普通に使っている食べ物、物品等の名称も最初に誰かが名付けたわけで、広義のネーミングに入る。

　ネーミングについて、最近話題になったものや私が個人的に、これはちょっとどうかなと感じたり、これは素晴らしいと思ったりしたものなどついて述べてみたい。

１　高輪ゲートウェイ駅

　「高輪ゲートウェイ駅」は、ＪＲ東日本の山手線、京浜東北線の田町駅と品川駅の間に、令和２年（２０２０年）３月に暫定開業した。

　この命名をするにあたり公募したところ、約６万４千件の応募があり、１位が「高輪」、２位が「芝浦」、その次に、「芝浜」、「新品川」、「泉岳寺」が続

き、「高輪ゲートウェイ」は、１３０位という結果であった。

私もこの駅名は、英語も入っているし、ゴロもよくないので、初めは、なんでこんな変な駅名を付けたのだろうかと思っていた。

この駅名については、世間から反対意見が噴出し、その撤回を求める運動が行われ、約４万８千人の署名が集まり、これを主導したコラムニスト、地図研究家、国語辞典編纂者によってＪＲ東日本に提出された。

これを受け取ったＪＲ側は、「現時点で駅名を変えるつもりはない。それよりも、駅名を浸透させる努力をする。」とし、「この地域は、古来街道が通っていて江戸の玄関口の高輪大木戸として賑わいを見せた地であり、今後も交流拠点として街全体の発展につながるようにとの願いを込めて選定した。」とコメントした。

駅周辺の再開発エリアは「グローバルゲートウェイ品川」と名付けられており、つまり「高輪」とこの再開発コンセプトを組み合わせて、この駅名が誕生したわけである。

[問題点等]

1　投票第１位は「高輪」なので、それに別の文言を付け加えたことにより、まったく別物になっており、公募の趣旨も問われる。

２　ある駅の周辺に、地名とか施設名などで、その駅名に入るかどうかで利益を受けるものが複数あると、双方を取り入れることが今までも行われている。

鎌倉周辺では、近年でも、京浜急行の「新逗子」は「逗子・葉山」に、小田急の「六会」は「六会日大前」に変更されている。横浜では、みなとみらい線には「元町・中華街」、地下鉄には、「伊勢佐木長者町」という駅もある。

２　市名―さくら市、みどり市、四国中央市

平成１１年から２１年の約１０年間に、地方公共団体の行政改革のため、市町村合併が推進された。いわゆる平成の大合併であり、「市町村合併の特例に関する法律」に基づいて行われた。

この間に、市町村の数が、３２３２から１７２７へと半分くらいに減っているが、その時に生まれた市の名前についての感想等は、次のとおりである。

（１）さくら市

「さくら市」は、栃木県の中部、宇都宮より北へ約１５Ｋｍの所に位置している。平成１７年（２００５年）３月に塩谷郡の氏家町と喜連川町が合併して

誕生、人口は約４万５千人である。

　市内には桜の名所が多く、住民にとって桜は長年親しまれてきた花であり、桜の花のように美しい市になってほしいという願いが込められているのだそうで、この市名の名付け親は、市内の小学生３人であった。

　[問題点等]

１　桜の名所の多い町は、日本中どこにもある。日本の国花であり、あまりにもポピュラーな花の名を市名に使うのはどうか。自己中心的ではないか。

２　氏家とか喜連川とか歴史のある響きもいい元々の地名をなぜ使わなかったのか、２つの町同士の間で綱引きがあったかもしれない。話がこじれると、合併話自体が壊れることもある。

３　距離的に近い千葉県の佐倉市と発音が同じ。

４　ひらがなの市名は全国的にかなりあり、青森県のむつ市、福島県のいわき市、茨城県のつくば市、千葉県のいすみ市、東京都のあきる野市、福井県のあわら市、沖縄県のうるま市などがあり、その多くは漢字やその読み方が難しかったりするもので、印象を柔らかくすることを狙ったものもある。

５　カタカナの市名には山梨県の南アルプス市があるが、せっかくの市名なのに、前にある山の陰になって、南アルプスの山容が市街地からはほとんど見

えない。

　また、沖縄県にコザ市があったが、隣村と合併して、今は沖縄市となっている。

（２）みどり市

「みどり市」は、平成１８年（２００６年）３月群馬県桐生市に隣接する３つの町村、笠懸町、大間々町、東村が合併して誕生、人口約４万９千人である。

みどり市とした理由として、３町村の合併協議会は、緑豊かな自然のあふれる、美しい街並みの市にしたい、自然を大切にし、自然と共に栄えていくようにしたい、また、明るく平和で清々しく、安心して生活でき、癒しのあるイメージがあるなどとしている。

なお、このほかの候補としては、あかがね市（足尾銅山から銅を運んだ街道が通っている。)、赤城市（赤城山の麓に位置している。)、わたらせ市（渡良瀬川が流れている。）などがあった。

[問題点等]

１　さくら市の桜と同様に、緑の多い町は日本中どこにもある。そもそも日本

は、世界的に見ても森林や山が多く、緑豊かな国で、そういう緑を市名に使うのはどうか。

2　歴史や文化、地理的なものを全くイメージできない。

3　赤城山とか渡良瀬川とか、全国的に知られている山や川の名称をなぜ使わなかったのか。

4　横浜市緑区とか相模原市緑区とかは、横浜や相模原とかいう大都市の中で最も緑豊かな地域ということで良しとできるが、県名を上に付けなければ、どこにあるのかも分からない。それ故に、今の時点で考えれば、とんでもない市名（さくら市も）であるが、今後他県等で同じ市名が使われることはないだろうから、２０年、３０年と時を経て定着して来れば、良い市名を先取りしたことになるのかもしれない。

（3）四国中央市

「四国中央市」は、平成１６年（２００４年）４月愛媛県宇摩地方の伊予三島市、川之江市など２市、１町、１村が合併して誕生した。人口約８万２千人、工業都市で、製紙業が盛んである。

位置的には、四国北部に瀬戸内海の燧灘が大きく入り込んでいるが、その沿岸の東部に当たる。四国全体から見れば、宇摩地方は、高松、松山、徳島、高

知という四国のすべての県庁所在地に通じる自動車道が結節しており、交通の要衝にあるため、将来的に道州制が導入された際、州都になるという将来構想を込めて、合併協議会で「四国中央市」の市名が採択された。

［問題点等］

1　市名の奇抜さのため、市内だけでなく、全国的に批判された。

2　味気なく、センスが感じられない。道州制を意識した先走りしすぎたネーミングで、その議論も進んでいるとは言えない。

3　地理的に四国の中央と言えるか疑問。

4　市民投票による市名の公募では、「宇摩市」、「うま市」、「ひうち市」などが、上位を占めていたにもかかわらず、合併協議会が一方的に決定したとされる。市民から１万弱の反対署名があったが、再考されなかった。

5　地元の郡名である「宇摩」を採用せず、消滅させた理由について、新聞社の取材に対して、旧伊予三島市長は、次のような発言をしている。

- 若い人は、「ひひーんとなく馬のようで嫌だ」と言っている。
- 「宇摩」にどんな由来があるのか知らない。誰も知らない。そんな地元の歴史になんかこだわることはない。
- 宇摩にならなくて本当に良かった。ウマなんて嫌に決まっている。

・ 賛成する市民も多く、年月の経過を待ちたい。

6　古語には、「うまし」（美しい，甘し、旨い）という言葉もあり、「うまし国」とは、満ち足りたよい国、美しい国、海や山の自然に恵まれた、心が満たされる地というような意味であるという。三重県は、この言葉が日本書紀に出ていることから、自県を「うまし国」としてキャンペーンなどをしている。「うま」を、市長は一方向からのみ捉えた感じがする。

3　東京スカイツリー

「東京スカイツリー」は、高さが６３４ｍで日本一、電波塔としては世界一である。名称については、一般公募による約１万９千件の命名案の中から、有識者で構成される検討委員会によって「東京スカイツリー」、「ライジングタワー」、「みらいタワー」、「ゆめみやぐら」など６つに絞られ、これに対して、インターネットを通じて一般投票が行われ、「東京スカイツリー」が最多得票を得て決定した。公募で最も多く寄せられた「大江戸タワー」は、建設予定地近くの和菓子屋がタワーの名称決定を見越してすでに商標を取得していたため使えず、また、「さくらタワー」や「すみだタワー」なども商標登録等の関係で使えなかったという。東京スカイツリーの著作権、商標権は、東武鉄道と東武タワースカイツリーが持っている。

［問題点等］

問題点等

１「スカイ」はいいが、「ツリー」という言葉は、ちょっと合わない。

２　親しみやすい名称なので、東京タワーと同じように、広く、受け入れられる可能性は高い。

４　あべのハルカス

「あべのハルカス」は、キタ、ミナミに次ぐ大阪第３の繁華街である天王寺・阿倍野地区のランドマークで、百貨店、オフィス、ホテル、美術館、展望台などで構成される超高層複合商業ビルである。

建設規模は、延床面積２１万２０００㎡、高さ３００ｍで、現在、日本で最も高いビルである。このビルができるまでは、日本一の高層ビルは、高さ２９６ｍの横浜ランドマークタワーであった。

名称中の「ハルカス」は、古語の「晴るかす」に由来しており、平安時代に書かれた「伊勢物語」などに出ており、「人の心を晴れ晴れとさせる」という意味があり、ビルの上層階から晴れやかな景色を見渡して爽快感を味わえることや、多彩で充実した施設で心地よさを感じてもらいたいという思いが込めら

れている。

「あべの」は、「大阪」「天王寺」「上方」などの案もあったが、日本一の高層ビルとして知名度を上げていけるのなら、「あべの」を全国区にしたいという意図があったそうである。

[問題点等]

1　「ハルカス」の古語の意味もさることながら、ビルの上層から、はるか彼方まで見渡せるということや、一方、ビルから遠く離れた場所からも、はるか遠くに見ることができるというような語感がある。

2　地名を平がなにし、古語を出典とした言葉をカタカナにして入れ、全体的に、柔らかく、清々しい印象を与えることに成功している。最近なされたネーミングとしては、一番であると思う。

5　まとめ

「令和」という元号は万葉集から採ったと言われているが、日本には素晴らしい古典が数多くあるので、これを有効利用するのがいいのではないか。

「あべのハルカス」は、その成功例ではないかと思う。

第２次大戦後は、英語やカタカナの入ったネーミングが好まれる傾向にあ

り、実際にそれが多いが、これからは、日本の歴史や文化をもっと意識することが必要ではないか。

　そのうえで、地名とか施設等の特徴を示す文言を入れ、それらを漢字、平がな、カタカナでうまく組み合わせれば、いいネーミングができるのではないかと考えている。

（参考：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』ほか）

※ 上記は、令和３年２月１２日、湘現会が実施した Zoom ミーティングでの筆者によるミニ講演の要旨である。